チョウセンゴミシ

Schisandra chinensis

マツブサ科

チョウセンゴミシ

名前の由来

「チョウセン(朝鮮)」は初め種子が朝鮮半島から伝えられたため（その後日本での自生が確認された）。「ゴミシ(五味子)」は果実の皮と肉が甘酸っぱく、核の中は辛苦で、全体に塩味があることからこう呼んだという。
漢字名：朝鮮五味子

形態的特徴

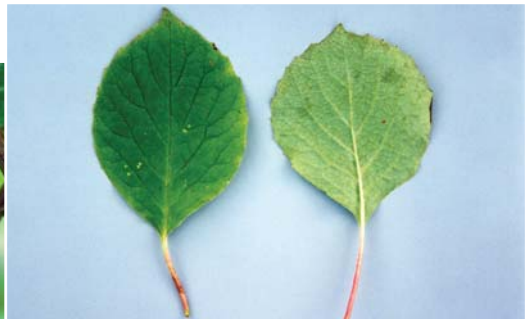
つる性木本。右巻き。葉は倒卵形～楕円形、長さ３～10cm、５～10対の凸状波状鋸歯あり、互生または短枝に頂性。花は淡黄白色で径１cm、５～７月に開花、雄花と雌花があるが、片方の花のみつくことが多く、雌雄異株のように思われている。果実は球形で径約７mm、９～10月に赤熟。

類似種との見分け方：チョウセンゴミシは果実が赤く熟すこと、葉の表面の脈がくぼむこと、葉のギザギザは波状で５～10対あること、質がマツブサほどは厚くないことなどで区別される。

チョウセンゴミシの雄花

チョウセンゴミシの雌花

チョウセンゴミシの実。熟す前


チョウセンゴミシの葉。５～10対の波状のギザギザがある

チョウセンゴミシの実

チョウセンゴミシの幹(つる)。巻き付いている方

チョウセンゴミシの冬芽

チョウセンゴミシの葉

生活サイクル

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
開　花　期		―	―	―								
結　実　期						―	―					

生育環境・分布

平地～山地の林や林縁に生える、落葉つる性木本。

分布：国外分布は、中国、朝鮮、樺太、アムール。国内分布は、北海道、本州中部以北。北海道内分布は、全域。十勝地方生息状況は、全域か。

繁殖生態・寿命

５～７月に開花、雄花と雌花があるが、片方の花のみつくことが多く、雌雄異株のように思われている。果実は球形で径約７㎜、９～10月に赤熟。鳥や動物によって種子散布される。寿命は不明。

他生物との関わり

鳥や動物によって種子散布される。

植栽関係

不明。

興味深い話

■果実酒。実の房を日干しし、乾かしたものをもんで果実をばらし、五味子（生薬）とする。咳止め・滋養強壮に利用される。クエン酸、リンゴ酸、酒石酸、単糖類、脂肪油中にシザンドリン、精油中にセスキテルペン及びアミノ酸のアルギニンなどを含んでいると言われる。シザンドリンは中枢神経興奮作用があるので、滋養強壮の生薬として用いられてきた。

■雄花と雌花があるが、片方の花のみつくことが多く、雌雄異株のように思われている。

■享保年代（1716～1735）に種子が朝鮮から伝えられため、この名となったが、明治になって日本にも自生することが知られるようになった。

〔つる植物について〕植物で他のものに依存して高く伸びる形は、次のように分けられる。

１．茎そのもので林木に巻き付いて登るもの　チョウセンゴミシ、ツルウメモドキ、サルナシ、マタタビなど

２．吸収根（付着根）が林木に吸い付いて登るもの　ツルアジサイ、イワガラミ、ツタなど

３．巻きひげを林木に巻き付けて登るもの　ヤマブドウ、ノブドウなど

チョウセンゴミシの実は生薬として、
また果実酒として利用される

雄花ばかりついたチョウセンゴミシ。
しかし雌雄異株ではない

配慮事項

成長には絡まるものが必要。絡まれる側の木が痛むことも考えられる。

参考文献

「改訂増補 牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎 著　小野 他編集　北隆館　1989

「北海道　樹木図鑑」佐藤孝夫　亜璃西社　1990

「新版 北海道の樹」辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫　北海道大学図書刊行会　1992

「樹木大図鑑」高橋秀男監修　北隆館　1991

「北海道　庭と庭木のすべて」原秀雄・須田輝　北海道新聞社　1978

「森林で遊ぼうシリーズ１ おもしろい木の話」北海道立林業試験場 監修　北海道林業普及協会　1996

「日本の野生植物　木本Ⅰ」佐竹義輔・原寛・亘理俊治・冨成忠夫 編　平凡社　1989